



コラム Column

韓国研究と韓流ブーム

柳 京熙*

私は韓国人でありながら韓国農業に関する研究歴は2年にも満たない。

何がそこまで韓国研究を疎遠にしたかなと思うと、自分の深層心理まで探らなければならないので、今回は省略する。ただ韓国研究の開始はあいにく韓流（そもそも実体はないと思うが）ブームが本格化した頃と、見事に重なる。もちろん私はそれとはまったく関係がない。私は農林水産政策研究所の韓国 FTA プローの仕事として研究を始めたからである。しかし、本格的な韓国研究に乗り出すきっかけとなった所があいにく春川である。春川といえば「冬ソナ」のファンであれば誰でも知る同ドラマの舞台であり、韓流ブームの源泉ともいえる所である。

なぜ春川と私の研究が関連を持ち始めていたかが、これからの話である。

私が韓国 FTA プローで韓国調査を開始したのが去年の1月である。

自分の国でありながら、すべてが新鮮であった。集落や行政システムが日本と類似しているにも関わらず、時には日本より極めて非効率的に感じられることもあった。しかしなぜか日本の農業よりは、遥かに魅力を感じることは確かであった。それは洗練されていないが、日本とは違う強い力を感じることが出来たからである。その時、それを確証に変えてくれたのが春川で農業法人の代表を務めている金氏との出会いだった。

彼との初めての出会いは不思議に韓国ではなく、日本である。

以前から韓国研究の実態を把握するために、どうしても現場の話を聞かなければならないと思っていたが、それもままならず苛立

った私に、ある先輩から金氏のことを紹介してもらったのである。いや正直、紹介はされていない。ただ宮崎に来るとの情報を入れた私が、宮崎まで飛んだのがすべての始まりである。一言で言えば招かざる客であったのである。ホテルロビーで初めて彼に会って、韓国農業についていろいろ話をしたところ、私に優しい手を差し延べてくれた。

金氏の好意で去年の秋、彼の農場を訪ねて以来、韓国、日本などで何回か再会し、彼の農業に対する考え方、事業成功の秘訣など様々なお話を聞くことが出来た。

彼について簡単に説明すると、現在、野菜の苗を専門的に生産し、農家へ供給する育苗センターを運営している。センターにおいては、年間雇人数は150名以上にも及び、去年の売り上げだけで日本円にして4億円を超えている。彼は別に専門的な事業者でもない。20歳から果菜生産だけをひたすら30年間ずっと続けてきた普通の農業者である。そこから97年から今の育苗センターを開始したわけだが、いまや韓国でもトップレベルの育苗センターにまで成長させた。さらに最近では日本の農家にも苗を供給しており、農業への情熱は計り知れない。何がこんなに短期間に、そこまで成功に導いたかが、今の私の一番の関心事であるが、彼に会えばそれはすぐ解決出来る。しかし不思議に会えば会うほどまた会いたくなる。彼の勤勉さ、人間性こそが成功の鍵であることは彼に会えばすぐわかることである。私もあらゆる所を十分飛び回ったと自負しているが、彼の農場より綺麗な所はおそらく見た覚えがない。それほど彼の農業に対する姿勢、そのものが一般とは遥かに違うのである。

以前からずっと私の脳裏を駆けまわっていた疑問の1つであった“なぜ農業だけで食べていけないのか”という素朴な疑問はすぐ“これから如何に農業で人を食わせていくか”という新たな課題に変わろうとしている。それは私が短い韓国研究で得られた一番の成果でもあり、あいにく韓流ブームの源泉である春川で体験した貴重な経験でもある。

* 日本学術振興会 当所外国人特別研究員